

研究ノート『八幡縁起絵巻』

——八幡大菩薩御縁起と足利義教奉納縁巻——

金 光 哲

はじめに

第一章 義教奉納本系—乙類—

- (1) 義教奉納本(乙類)の成立
- (2) 義教奉納本—諸本—

第二章 発端—新羅日本攻撃説

- (1) 甲類の諸本と絵巻の発端
- (2) 異本の検討
- (3) 新羅日本攻撃説—塵輪

第三章 住吉神—老翁—

- (1) 「狂言回し」役の老翁
- (2) 老翁—住吉神—

第四章 甲類の成立論

- (1) 納淵宮本と「平時平」譚
- (2) 平時平譚と筥崎宮縁起

キーワード：八幡縁起絵巻・八幡縁起絵巻の
系統・八幡縁起絵巻の諸本・八
幡縁起絵巻の成立・八幡縁起絵
巻の内容

はじめに

絵巻は平安時代に発生し、それ以降多数の絵巻が誕生した。このなかには『信貴山縁起』、『粉河寺縁起』、『伴大納言絵詞』などのように、それしか存在しない単本が多い。しかし、絵巻によっては模写を別にしても、複数の諸本を有

するものがある。

たとえば、『北野天神縁起』は詞書の冒頭の異同によって、

甲類 王城鎮守神々多くましませと……

乙類 日本我朝は神明の御めくみ……

丙類 漢家本朝靈験不思議一にあらさる……
のように、甲・乙・丙類に系統⁽¹⁾づけられ、諸本も分類別に整理⁽²⁾されている。甲類の「承久本」(根本縁起)、丙類の「弘安本」と「松崎天神縁起」が、『続日本の絵巻』(中央公論社)に収録されている。

次に、『融通念仏縁起』は模本や版本を含め、二十八本が存在し、次のように系統化⁽³⁾されている。

I 正和本系統

II 良鎮本系統	A 明德版本成立以前 (肉筆本)
	B 明德版本とそれ以降 (版本・肉筆本)

良鎮房は永徳二年～応永三十年(一三八二～一四二三)間の生存が確認できるが、融通念仏の普及のため絵巻の木版化を企図し、明德二年

(1) 梅津次郎「天神縁起絵巻——津田本と光信本」、『美術研究』一一四、昭和十六年。

(2) 松原茂「松崎天神縁起」小考、『続日本絵巻大成』

中央公論社。

(3) 梅津次郎「初期の融通念仏縁起について」、『仏教芸術』第三号、毎日新聞社、昭和三十三年。

(一三九二)に完成した。それが「明德版本」といわれ、日本の版画史上、記念碑的な作品である。鎌倉末期の成立とされる正和本系のシカゴ美術館蔵の上巻、クリーブランド美術館蔵の下巻が、『続日本の絵巻』に収録されている。また、「明德版本」系は、

明德版本系	A	明德版本
		大念仏寺本、池田家本
	B	清涼寺本系（肉筆本）
		文安本、禅林寺本

のように分類され、応永二十三年（一四一六）の識語がある「清涼寺本」の写真が、『日本美術』（至文堂）No.302に掲載されている。平成三年十月、大阪市立博物館で特別展「融通念仏宗—その歴史と遺宝—」が開かれている。

さて、「八幡縁起絵」も、上記の『北野天神縁起』や『融通念仏縁起』のようにおおいに流布し、複数の系統をもち、複数の諸本をもつ。「八幡縁起絵」を二系統に分類したのは、宮次男氏であった。論稿「八幡縁起絵巻⁽⁴⁾」において、一類・二類に分類し、論稿「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起⁽⁵⁾」上では、甲類・乙類の用語を使用した。

内容は、甲類にしろ、乙類にしろ、その基本的な骨格は、

- A 神功皇后の新羅征服譚
- B 八幡神の利生譚
- C 和氣清麻呂と八幡神の託宣

で構成されている。このうち、本稿で取り扱う「神功皇后の新羅征服譚」は、次のように細分化される。

① 新羅より「塵輪」の日本襲撃。

※乙類本だけの独自記事。

- ② 神功皇后の出陣。
- ③ 住吉神—老翁の出現。
- ④ 細男の舞と磯良の出現。
- ⑤ 「乾珠・満珠」譚。
- ⑥ 「新羅国の大王は日本の犬」譚。
- ⑦ 応神の「胎内指揮」譚と誕生。

本稿では、甲・乙類の成立を論じるが、特に甲類の成立については、一章を立てて検討する。また、甲類は、簡略本系と「狂女」系の二種の異本を明らかにする。内容では、老翁—住吉神—について検討してみた。

第一章 義教奉納本系—乙類—

(1) 義教奉納本（乙類）の成立

乙類というのは、室町幕府第六代将軍足利義教が永享五年（一四三三）四月二十一日に、京都府八幡市の石清水八幡宮、大阪府羽曳野市の誉田八幡宮、大分県宇佐市の宇佐八幡宮に奉納した「新図」と、その系統のことである。したがって本稿では、系統を含め「義教奉納本」の用語を使用する。石清水八幡宮奉納本⁽⁶⁾と宇佐八幡宮奉納本⁽⁷⁾には、

為_レ貴_二三所之威光_一 尋_二取両卷之縁起_一。
則致_二新図_一 奉_二納尊前_一。早鑒_二敬神之志_一、弥垂_二感応之睠_一 矣。

永享五年孟夏廿一日。征夷大將軍左大臣兼右近衛大將源朝臣（花押）

とする奥書がある。このうち、宇佐八幡宮奉納本は現存しない。また、石清水八幡宮奉納本は昭和二十二年に焼失したが、コロタイプ版の写真の一部が『石清水八幡宮史⁽⁶⁾』第九輯に収められている。

(4) 宮次男「八幡縁起絵巻」、『新修 日本絵巻物全集』別巻2、角川書店。

(5) 宮次男「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」上、『美

術研究』第三三三。

(6) 『石清水八幡宮史料叢書』二、石清水八幡宮社務所。

(7) 『増補 考古画譜』巻九、明治二十二年。

菅田八幡宮奉納本⁽⁹⁾には、

新図 神功皇后之縁起奉_二 納菅田宗廟之宝
前_一。絵其両巻象_二 于二儀_一、即憑_二 不測
之感通_一、常施_二 無為之德化_一 而已。

永享五年孟夏廿一日。征夷大將軍左大
臣兼右近衛大將源朝臣 (花押)

とあって、奉納本のそれぞれの奥書に「新図」
とあることから、「旧図」の存在が推測される。
『神功皇后縁起』絵巻と同時に奉納した『菅田
宗廟縁起絵巻』の奥書に、

先年当社参詣之時、拝_二 見縁起三巻_一 之處
事多_二 疎略_一。絵未_二 周備_一。仍拾_二 旧本
之遺_一 更致_二 新写之功_一。……

とあり、足利義教が「先年当社参詣」し、その
とき「旧本」を「拝見」したことが判明する。
ただし、『神功皇后縁起』の奥書には「旧本」
についての言及はない。

ところで、『看聞御記⁽¹⁰⁾』永享三年七月一日
条に、

内裏へ絵四巻 八幡縁起絵二巻。宝
篋印施羅尼絵二巻。 進之。御
乳入参。

とあり、後花園天皇に実父の伏見宮貞成親王が
「八幡縁起絵二巻」を「進之」している。また、
永享七年七月八日条に、

御乳入参。内裏八幡縁起御絵 二月。納宮。
詞旧院御筆。
申出持参。後小松院御在位之時、被_レ 書云
々々。殊勝御絵也。

とある。この「八幡縁起御絵」二巻の詞書は、
後小松天皇が「御在位之時」、つまり、応永十
九年(一四一二)八月の譲位以前に書いたもの
で、そうすると、この「八幡縁起御絵」二巻は、

永享三年(一四三一)の「八幡縁起絵」二巻と
は、別個のものであろう。問題は、この二種類
の「八幡縁起御絵」が「旧図」かどうかである
が、これ以上の確証がないので、可能性を指摘
する範囲をでない。

(2) 義教奉納本

A 『由原八幡宮御縁起』(大分県杵原八幡 宮蔵)

制作年代は、大永年間⁽¹¹⁾(一五二一～七)か、
天文年間⁽¹²⁾(一五三二～五四)に比定されてい
る。この『由原八幡宮御縁起』は、江戸時代の
貞享二年(一六八五)に、山口正致が書写した
複数の「山口正致書写」系統⁽¹³⁾がある。

○ 外題「由原八幡宮縁起」

統群書類従本(内閣文庫蔵浅草文庫)。

○ 外題「豊後国由原八幡縁記」

神宮文庫蔵。村井古巖奉納本。

○ 外題「由原八幡社縁起」

東京大学図書館蔵。南葵文庫旧蔵本。

B 『八幡縁起』(奈良東大寺蔵)

天文四年(一五三五)に、奈良東大寺手向山
八幡宮宝殿⁽¹⁴⁾に奉納されたもの。

C 『江川八幡縁起⁽¹⁵⁾』(国立史料館蔵)

和歌山県日高郡川辺町江川正八幡宮。国立史
料館「日高郡古文書」に収載。書写年不明。

D 「石清水八幡宮本」系

○ 和歌山県海草郡・野上八幡宮本⁽¹⁶⁾

野上八幡神社文書「八幡宮縁起」に、「一条
院之御宇、石清水八幡宮為_二 別宮別院_一」とあ
る。江戸時代の慶安元年(一六四八)に詞書を

↘ (8)覆刻『石清水八幡宮史』第九輯、統群書類従完成会。
(9)羽曳野市文化財編 別冊『絵巻物集』、羽曳野市。
(10)『統群書類従』補遺二、統群書類従完成会。
(11)渡辺文雄「伝土佐光茂筆 大分由原八幡宮縁起につ
いて」、『大分県立宇佐風土記の丘、歴史民俗資料館研
究紀要』二。

(12)『群書解題』第六巻、神祇部、「由原八幡縁起」の項、
統群書類従完成会。

(13)注12。

(14)奈良国立博物館監修『社寺縁起絵』、角川書店。

(15)『神道大系』神社編四十一、神道大系編纂会。

(16)注15。

書写したものである。

○ 大阪市平野・大念仏寺本⁽¹⁷⁾

書写年不明。

E 「宇佐八幡宮本」系

○ 国学院大学蔵

書写年不明。『国書総目録』（岩波書店）の「八幡縁起」の項による。

F 「誉田八幡宮本」系

○ 大橋龍慶模写本

寛永十八年（一六四一）、大橋龍慶は『誉田宗廟縁起』と『神功皇后縁起』を模写し、誉田八幡宮に奉納した。

○ 大橋龍慶模写本の再写本

新井白石の『退私録⁽¹⁸⁾』巻之中、「誉田八幡宮縁起神功皇后の縁起の事」に、大橋龍慶模写本の奥書を筆写したうえで、「正徳甲午六月廿五日、誉田八幡宮并に神功皇后の縁起等新写の巻物の跋に」とあり、これは、正徳四年（一七一四）に模写本を「新写」した、ということの意味するものであろう。

G 冊子本と奈良絵本⁽¹⁹⁾

室町時代にはいると、絵巻でなく詞書だけの冊子本が出現した。次のものは、室町中期の成立とされる。

○ 『八幡宮御縁起』 一冊

室町後期から江戸初期にかけて出現した「奈良絵本」では、「八幡本地」の外題で流布した。次の大形本（三〇×二二）は、ともに江戸初期の成立とされる。

○ 『八幡本地』 上下二冊

○ 『八まんの本地』 上下二冊

第二章 発端—新羅日本攻撃説

(1) 甲類の諸本と絵巻の発端

A 鎌倉末期と南北朝期の諸本

甲類は内題に「八幡大菩薩御縁起」をもつ。

甲類—八幡大菩薩御縁起系—でもっとも古いものは、鎌倉最末期の元享二年（一三二二）成立の出光美術館蔵『八幡大菩薩御縁起』である。これは、昭和六十三年六月十四日～七月二十四日の「絵巻物展⁽²⁰⁾」で公開された。次に、南北朝期では、康応元年（一三八九）のサンフランシスコ・アジア美術館⁽²¹⁾蔵のものがある。出光美術館本が知られるまでは、このアジア美術館本がもっとも古いとされた。ともかく、鎌倉末期と南北朝期に一本ずつの存在を確認できる。

○ 出光美術館本

元享二年（一三二二）成立。未見。

○ サンフランシスコ・アジア美術館本

康応元年（一三八九）成立。発端の詞書が欠落している。

B 室町時代の諸本

○ 「衣奈八幡宮縁起」（和歌山県日高郡由良町）

室町時代でもっとも早い事例で、応永九年（一四〇二）の成立である。「江戸時代に忠実に書写せられた詞書写本上下二巻⁽²²⁾」があって、それが『神道大系⁽²³⁾』神社編四十一に翻刻されている。衣奈宮本についてはのちに言及する。

○ 大分県・宇佐八幡宮本

応永二十八年（一四二一）から、永享十一年

(17) 古典文庫『中世神仏説話』、古典文庫。

(18) 『新井白石全集』第五、明治三十九年。(19) 横山重・太田武夫校訂『室町時代物語集』第一、井上書房、昭和三十七年。

(20) 小図録『絵巻物』、出光美術館。

(21) 前掲書『新修 日本絵巻物全集』別巻2。

(22) 村田正志「花山院長親と衣奈八幡宮縁起絵巻」、『南北朝史論』、中央公論社。

(23) 『神道大系』神社編四十一、紀伊・淡路国、神道大系編纂会。

(一四三九)まで五度の書写⁽²⁴⁾をへたもの。未見。

○ 大分県杵築市・奈多宮本

応永二十八年に丹後国一宮宝蔵本を写したものを、さらに、永禄三年(一五六〇)に書写したものである。詞書が文化庁編『宇佐・国東半島を中心とする文化財』(昭和四十四年三月)に翻刻されている。絵は未見。

○ 兵庫県洲本市・由良湊神社本⁽²⁵⁾

永享三年(一四三一)成立。奥書によれば、炬口八幡宮(洲本市)の宥恵が、永享三年に紀伊国有田郡の東広庄八幡宮より借用、書写したものを、文安元年(一四四四)に由良八幡宮に奉納したものである。解題によれば、万治元年(一六五八)、由良八幡宮を由良湊神社の社地に移し、由良湊神社を境内末社とした。明治三年、由良八幡宮本殿に由良湊神社を合祀し、由良湊神社と称している。

○ 京都府綾部市・高津八幡宮本

文明十七年(一四八五)成立。これは平成元年春、高津八幡宮の蔵を整理中に発見⁽²⁶⁾されたものである。

○ 洲本市・炬口八幡神社本

大永七年(一五二七)成立。未見。奥書⁽²⁷⁾に、

右縁起安宅駿河守吉安

大永^{丁卯}七 五月吉日

とある。ただし、卯は亥の間違い。ところで、宮次男氏の論稿「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」の研究資料⁽²⁸⁾によれば、所蔵地は明記していないが、「淡路島浜天神宮旧蔵本」といわれるものがあり、この奥書には、

右御縁起檀越安宅□河守吉安

大永七^{丁亥}五月吉日

とあり、箱の蓋表に、

淡路島 浜天神宮旧蔵^{大永七年銘}

八幡大神宮縁起絵巻

とする墨書がある。これによれば、安宅駿河守吉安が、炬口八幡神社と浜天神宮のそれぞれ別に、寄進したものと推測できる。

しかし、同論文には、依拠史料はわからないが、安宅吉安について大永七年に「炬口八幡宮に縁起一卷と甲冑を寄進した安宅治興の一族」とする記事がある。この「縁起一卷」が「八幡大菩薩御縁起」とすれば、炬口八幡宮には治興が寄進した別の縁起があったことになり、炬口八幡神社本の奥書と矛盾する。

○ 奈良・天理大図書館本(享禄四年本)

享禄四年(一五三一)成立。詞書⁽²⁹⁾が翻刻されている。

○ 大阪市池田市・逸翁美術館本

「十四世紀も、末期を下らない⁽³⁰⁾」とする考えもあるが、不明である。

C 甲類の発端の詞書

甲類の大部分の諸本は、語句の多少の違いはあっても、内容は大同小異である。これを「標準系」と呼称する。発端部分に若干の欠落がある「由良湊神社本」を中心に、「高津宮本」を参考にして、発端の詞書をみてみよう。欠落部分は「享禄四年本」で補充した。([……]内が「由良湊神社本」の欠落部分。……≫印までが「高津宮本」の欠落部分である)。

標準系の詞書

(24)「大分県立宇佐風土記の丘、歴史民俗資料館ニュース」№17。

(25)前掲書『神道大系』神社編四十一。

(26)『綾部史談』第127号、綾部史談会。

(27)前掲書『神道大系』神社編四十一。

(28)『美術研究』第三三九号。

(29)横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第十、角川書店。

(30)前掲書『美術研究』第三三九号。

① [夫、我朝、秋津嶋豊] 葦原中津国、昔天神[七代、地神五代、已上十二代、皆神] 御代也。……彼帝ヨリ以来、人王十六代御末応神天皇申、今八幡大菩薩御事也。

② 御父仲哀天王御宇二年^{癸酉}、新羅国[ヨリ] 夷敵ノ軍兵競来テ、本朝討取トス。天皇>>勅シテノ給。「皇后ノ宮懷妊ノ王子、若為_二男子_一可_レ成_二龍王_一。若為_二女子_一可_レ與_二龍王后_一」云々。而、仲哀天王^{庚辰}九年二月六日、於_二筑紫橿日宮_一無_レ程崩御畢。

③ 其後、神功皇后、新羅・百濟・高麗討随タメニ、鎮西^{カノ}へ趣キ給シ時、羅勢門ヲ出サセ給フトテ、祈請セラレケルハ、「願ハ天道我ニカヲ副テ、彼異国ノ敵滅^{オホボ}シテ、我國ヲ安穩ナラシ給ヘ」ト申シ給シカハ、何ヨリトモナク、白髮老翁一人出来レリ。

④ 皇后、問テ曰ク、「何ナル人ナルラムヤ」。老人、答テ曰ク、「君、新羅・百濟等ヲ打随ムト思シ召シ立セ給フ。翁モ御供申テ、御力ニモ成リ奉ラントテ參テ候也」ト申ス。時、皇后御心ノ内ニ思食^{オボシメ}スヤウ、「彼老人ノ脉、サシモ我カカニ成ルベシト不_レ覺」ト思食シナカラ、「若、變化ノ物ニテモヤ有ラム」トテ、召具シテ鎮西へ下ラセ給。

以上が甲類「標準系」の発端の詞書である。

(2) 異本の検討

甲類一八幡大菩薩御縁起一には、二種類の異本が存在する。

A 簡略本一衣奈宮本

「衣奈宮本」は、発端部分だけをとりても、

次のように極度に簡素化されている。番号は標準系の番号にそれぞれ対応する。

① 秋津嶋豊葦原中津国、……彼帝より十六代応神天皇と申すは、今の八幡大神の事也。御父仲哀天皇の御時、異国より本朝を討取むとせし故、庚辰二月六日天皇、筑紫の橿日の宮にをはします。

② この時、皇后を神功皇后と申す。応神天皇胎内にやどり給。天皇仰られけるは、「胎内の子、男子ならば龍王のむことすべし。もし女子ならば龍王の娘とすべし」となむ。

③ さて神功皇后「新羅・百濟・高麗をうつべし」とて、急ぎ給ひし時、羅城門を出、おほせられけるは、「願は、天道我に異国を亡して、我国をおさめさせ給へ」と申給しかば、いづくよりともなく老翁一人出来りて、三韓追討の御供つかうまつるべきよしのぞみけるを、召具して鎮西へ下らせ給ひにけり。

この簡素化は発端部分だけの現象ではなく、ほかの箇所も同様である。このように、極度に簡素化されたのは、管見の範囲で「衣奈宮本」だけで孤本あるが、これが全体のなかでどのような位置をしめすのか、不明である。

B 「狂女」系

昭和六十三年に発見された広島県御調郡の御調八幡宮蔵『八幡大菩薩御縁起』は、永禄九年(一五六六)書写のもの⁽³¹⁾とされる。標準系②と③の間に、神功皇后が「狂女」になったとする独自の記事が添加されている。

④ 其後、神功皇后「彼夷狄を攻從」と思召ける時に、俄狂女之姿と成給ふ。武内大

(31) 小林芳規著『角筆のみちびく世界』(中公新書)。

古典研究会編『国書漢籍論集』、汲古書院。

小林芳規「^{備後国御調八幡宮蔵本}角筆下絵八幡大菩薩御縁起」

臣「是者如何成御事哉覽」と申させ給へは、御託宣あり。「我ハこれ、五十鈴川之^{ホトリ}辺に住む天照大神也。三韓已（ニ）起而、拾万八千艘之船を出し立、数拾万之軍兵を催をし、我国を攻むとする也。急、此地に不^レ来前に可^レ禦」と御託宣ありハ、

⑤ 武内重而申さく、「神明にて御座さは、其験を顕給へ」と申。御身より光明を放し、十方を照しての給はく、「高き山の嶺に登、朝廷之神達を驚かし申さハ御瑞相有へし」と御託宣あて、忽、本之御心なり給。

⑥ 御告之儘、四王寺山に御幸あて、榊之枝に金之鈴を付、七日七夜之御神楽をなし祈念し給へは、不思議なる御瑞相あり、

これは衣奈宮本と同じく孤本と思っていたが、承応二年（一六五二）書写の国文学研究資料館蔵本⁽³²⁾が、同じ系統であることが判明した。これによって、「狂女」系は複数の写本の存在が確認でき、これから以後も、この系統の写本出現の可能性を期待できる。

この「狂女」云々の記事は、石清水八幡宮菊大路家本『八幡愚童記⁽³³⁾ 上^上』（以下、菊大路家本）に、

① 然間、皇后御物狂ノ気出来ル。武内大臣御簾ヲ半ニ巻上テ、「如何ナル事ニテ坐ヤ」ト被^レ申レハ、「我ハ五十鈴川ノ^{ホトリ}辺ニ栖、天照大神也。三韓既、十万八千艘ノ船ヲ出シ立テ、数万ノ軍兵只今来ラントス。此地ニ不^レ着前ニ、急、異国ニ可^レ向給也」トソ仰ケル。

② 武内ハ「一ノ験シヲ現セサセ給へ」ト

申サル。御詞ノ終ヌ前ニ光ヲ放テ照テニ十方ヲ宣ク、「……山ノ嶺ニ上テ、朝廷ノ神達ヲ驚シ申給ハ、其瑞、忽可^レ顕」トテ、御心本ニ^(ママ)複シ給ケリ。

③ 四王寺山ニ御行シテ、榊ノ枝ニ大鈴ヲ付テ、……

とあって、甲類「狂女」系がそのまま、『八幡愚童記』に依拠したものであることが判明する。

菊大路家本の初稿本は、石清水八幡宮の関係者によって、永仁元年～正安二年（一二九三～一三〇〇）間に作成⁽³⁴⁾されたものとされる。したがって、「狂女」系の成立の上限は、永仁元年～正安二年である。

C 「狂女」系の判定基準

甲類一八幡大菩薩御縁起一には、発端の詞書が欠落している写本がある。例えば、アジア美術館本がそうである。この場合、「狂女」系と判断できる個所が二ヶ所ある。一つは、「狂女」系は、「石鉢権現」出現と「金色之鷹」出現の場面の間に、次の詞書がある。この詞書は、標準系のアジア美術館本には、三才の小児が現われる場面に、付随してある。

○ 其後馬城峯に石鉢権現と顕て、大足比咩大神、諸共に三所竝て御座すなり。高さ一丈四、五尺。広さ一丈計にて顕給ふ。寒雪之比ハ御鉢、猶暖にまします。但、人恐を成て奉^レ近事なし。造^レ御殿^ニ而蓋^レ之。有^レ御託宣^ニ云、「我石鉢に顕るゝ事ハ、末代迄も不^レ驚不^レ崩而、此風に當、此流を^{のむ}辱者、可^レ滅^ニ其罪障^ニ也。莫^レ造^ニ御殿^ニ」と云々。

(32)『神道大系』文学編二。

(33)『神道大系』古典編十三。菊大路家本は『八幡愚童記』となっているが、他に、『八幡宮愚童記』（天理大学吉田文庫本）、『八幡大菩薩愚童訓』（筑紫本）、『八幡大菩薩愚童訓』（文明本）などある。『八幡愚童

訓』（群書類従本）系統を総括的に『八幡愚童訓』甲とされている。しかし、『八幡愚童訓』甲も細分化（拙稿『八幡愚童訓』甲の「屠児」記事をめぐって）、『部落問題研究』第137号）できる。

(34)『群書解題』第六巻、西田長男氏の解題による。

判断可能なもう一か所は、称徳天皇と和氣清麻呂が登場する場面の詞書で、標準系は、

其時ノ国王ヨリ六年ニ一度、勅使ヲ立テ国政事ヲ定メ御坐す。

ではじまるが、「狂女」系は、

其後、宇佐へは從_レ国王_一六ケ年ニ……とある。このように、「宇佐」がある方が「狂女」系である。

(3) 新羅日本攻撃説—塵輪

甲類によれば、神功皇后が「新羅・百済・高麗ヲ討随」うために出陣した原因は、仲哀天皇二年の時、「本朝ヲ討取」ろうと「新羅国ヨリ夷敵ノ軍兵競来」たためであるとした。一方、乙類（義教奉納本）では、この「新羅日本攻撃」説の形象として、異形「塵輪」を創作、仲哀天皇はその「塵輪」との戦いで、流れ矢に当たって死ぬという物語まで創作される。神功皇后の「新羅討伐」は、その「報復戦」として展開する。住吉神をはじめとする神々の「新羅討伐参戦」説が、この延長上で創作されていく。これらが歴史的事実として受容された。

〔塵輪の攻撃〕

① 仲哀天皇の御宇二年癸酉歳にあたりて、新羅国より数万の軍兵攻来り、日本を討とらんとす。然間、天皇みつから五万余人の官軍を前後に相したかへて、長門国豊浦宮にして異国の凶賊を拒かしめ給。

② 此時、異国より塵輪と云不思議の者、色ハ赤く、頭ハ八にして、形鬼神のこくなるか、黒雲に乗て日本につく。人民を殺すこと数をしらす。……

③ ……第六日にあたりて、塵輪黒雲に乗_{いできた}て出来る。高丸・武内大臣をもて此よしを奏するに、御門御弓をとり、矢をはけて射させ給へハ、塵輪か頸、忽にい切られて、

頭と身と二に成て落にけり。

〔仲哀天皇の死と神功皇后の出陣〕

④ かゝる所に何とかしたりけむ。流矢まいりて玉軀につゝかあり。御命すてにあやうく見させ給けれハ、妃神功皇后をちかつけ奉りて、仰られけるハ、「我いかにもなりなは、皇后大將軍として、異国を討たひらせ給へし。御腹にやとり給ふハ皇子にてましませは、誕生の後、御位につけ奉給へし」とて、同九年二月六日、御歳五十二にして、筑紫の橿日宮において、終に崩御畢。

⑤ 皇后即、先皇の御遺詔にまかせて、新羅・百済等に攻めむかために、数千騎の軍兵を相具して、異国に趣給ふ。（誉田八幡宮本）

甲類と乙類の決定的な相違は、甲類に「塵輪」の記事がないことである。しかし「塵輪」は乙類（義教奉納本）の創作ではない。菊大路家本『八幡愚童記』上に、

○ 三千世界ノ中央、一四天下ノ南辺……天竺ヲ五ニ分ケ、十六ノ大国、五百ノ中国、十千ノ小国、粟散辺土出来り、帝王各御坐ス。此中ニ新羅・百済・高麗国ノ王臣ハ、食欲心ニ飽タル事ナシ。驕恣不_レ絶餘り、日本我朝ヲ討取ントテ、寄来事数箇度也。
○ ^{フツツ}情、異国襲来ヲ算レハ、人王第九開化天皇四十八年ニ二十万三千人、仲哀天皇ノ御宇ニ二十万三千人、神功皇后ノ御代ニ三万八千五百人、応神天皇ノ御宇ニ二十五万人、敏達天皇ノ御宇ニハ、播磨国明石浦マテ着ニケリ。其子孫ハ、今世ノ屠兇也。……已上、十一箇度競来ト云ヘトモ、皆被_レ追帰_一、多ハ滅亡セリ。

とあって、次のように、「塵輪」の場面がつづく。（番号は上記番号と対応）

② 其中ニ仲哀天皇ノ御時ハ、異国ヨリ責

寄ントテ、先塵輪ト云者ノ形ハ如_ニ鬼神_一、
身色赤、頭ハハニシテ、黒雲ニ乗テ虚空ヲ
飛テ日本ニ着ク。人民ヲ取_レ致_ス。遠_ニ優_ニテ是

ヲ射ハ矢折レ、近寄レハ心迷テ身ヲ亡ス。……
① 御門ハ五万人ノ軍兵ヲ前後ニ聳_ニキ給
テ、長門國豊浦ノ郡ニ着キ給フ。

③ ……當_ニ第六日_一黒雲忽聳テ、塵輪目
ヲ怒カシ、弓矢ヲ持テ来リケレハ、……御
門自、御弓ヲ取り、矢ヲ拊_{ハヅ}テ能挽射サセ給
ヘハ、塵輪カ頭射切ラレテ、頭ト身ト二ニ
成テ落ニケリ。

④ 塵輪カ失ヌル事ハ雖_レ悦ト、如何ンカ
シタリケン、流矢參テ玉軀ニ着カアリ。……
后ノ御手ヲ取テ、御胸ノ上ニ置給テ、「……
此孕給ハ皇子ナルヘシ。相構、急異國ヲ討
平、王子ヲ即_レ位治_ニ国土_一給ヘシ」ト、
申サセ給ケル。其時、皇后ハ落_ル涙ヲ押ツ
、_、「異國ノ事ハ御心安ク可_ニ思食_一」……

とある。乙類一義教奉納本一系統の「塵輪」記
事は、『八幡愚童記』甲の記事に忠実に依拠し
たものである。

第三章 住吉神一老翁一

(1) 「狂言回し」役の老翁

老翁は甲類に、

羅勢門ニ出来シ老人ハ、則、住吉大明神、
本地虚空藏菩薩也。(由良宮本)

とあり、乙類には、

彼老翁は、住吉大明神にてまします。(誉
田宮本)

と、老翁＝住吉大明神とする。甲類にしる、乙
類にしる、老翁は物語の展開において「狂言回
し」としての役割を担う。

A 牛窓地名譚と塵輪

[甲類一由良宮本]

① 備前ノ泊ニ付セ給シ時、立長十丈ハカ
リナル牛出来テ、彼ノ皇后ノ乗セ給タル御
船ヲ損ササントスル時、此老人、彼牛ノ角
ヲ取テ海中ヘナケ入ツ。

② 仍、此ノ泊ヲハ牛マロハシト書テハ、
牛窓ト申也。而ニ此牛、其ノ海中一嶋ト成
テ、今侍リ。

[乙類一誉田宮本]

① 皇后、備後のとまりに付セ給時、長十
丈はかりなる牛、興_(神)の方より出来て、のら
せ給つる御船を損せんとす。其時、此老翁、
彼牛の二の角を取て、海中へなけ入つ。

② 然に此牛、海中にして嶋となりて、今
にあり。仍、此所をは、牛まといひて、
文字にハ、牛まろはしと書たり。

『鹿苑院殿嚴嶋詣記⁽³⁵⁾』は、康応元年(一三
八九)三月、足利義満は安芸の嚴嶋社に参詣し
たが、それに随行した今川了俊の紀行文である。
これに、

(三月)六日、御舟いでて、牛窓、ま井の
すなどに到りぬ。誠や、此牛窓といふ所は、
昔、息長足比売_{おきながたらしひめ}の御舟出のとき、けしかる
牛の、御舟を_{くつがへ}覆_フさむとしけるを、住吉の
御神の取りて投げさせ給しかば、かの牛ま
ろび死けるが、嶋と成て、それより牛窓と
いふ也けり。牛まろぶと書て、牛窓とよむ
となむ、聞侍しなり。(一部仮名を漢字に
変更)

とある。

林羅山は『本朝神社考⁽³⁶⁾』下之六で、

神功皇后舟過_ニ備前海上_一時、有_ニ大牛_一
出、欲_レ覆_ニ舟_一。住吉明神、化_ニ老翁_一、

(35)『群書類従』第十八輯。

(36)『神道大系』論説編二十。

以^テ其^ノ角^ヲ投^ス倒^ス之^ヲ。故^ニ名^ヲ其^ノ處^ニ曰^フ牛^ノ軛^ト。今云^フ牛^ノ窓^ト訛^{レリ}也。

としたうえで、次のように、牛窓に「塵輪」と結びつける創作を行なった。

其^ノ牛^ハ蓋^シ塵^ノ輪^ノ鬼^ノ之^ノ所^ニ化^{スル}也。塵^ノ輪^リ有^リ二^ハ八^ノ頭^ト。嘗^ニ駕^シ黒^ノ雲^ニ来^リ、侵^ス仲^ノ哀^ノ帝^ト。帝^ハ射^レ之^ヲ。身^ハ首^ヲ為^シ二^ハ落^ス死^ス。塵^ノ輪^モ亦^モ射^レ帝^ト。帝^ハ遂^ニ崩^ス。

『本朝神社考』の成立⁽³⁷⁾は、寛永十五年～正保二年（一六三八～四五）間とされるが、この林羅山の創作は、大きな影響を与えた。宝永七年（一七一〇）書写の『吉備前鑑⁽³⁸⁾』は、『本朝神社考』を引用したうえで、

塵輪島。牛窓ノ南ニアリ。俗ニ前島ト云。と、塵輪島を創作した。また、年代不詳の『吉備前秘録⁽³⁹⁾』は、

黒島。前島ノ西ニ有。塵輪鬼仲哀帝ニ被^レ射落^シ所。

と、仲哀天皇が弓箭を射った島まで創造した。

〔絵画上の相違〕

乙類は牛があお向けになっている。（ただし、甲類の御調宮本もあお向け）

B 座礁

〔甲類一由良宮本〕

其後、門司ノ関ヨリ上ニ、大江カ崎ト申、泊^{（潮）}ニツカセ給シ時、塩悉ク干上リテ、船通ヘキニアラス。其時、此翁彼ノ船トモヲ、只一人シテ、興中ヘ皆押出シケリ。此時、皇后弥々、馮^{タノモ}敷事ニ思召ケリ。

〔乙類一菅田宮本〕

其後、門司関の上、大江か崎と云所につかせ給ふ。折節、塩干の時分にて、船かよふへき様もなし。其時、此翁只一人して、皇

后めされたる御船ともを、興中へ皆押出しけり。人々、不思議の思をなしけり。

C 葦屋津と大岩と矢

〔甲類一由良宮本〕（ ）内は御調宮本。

皇后……葦^{（葦）}屋ノ津ニ付セ給フ時、彼泊ニテ（彼老人）弓箭ヲ取出シテ、射侍ケルヲ御覧スレハ、ユクヘモナキ岩ノ崎十丈ハカリ指出タルヲ、引取テイタリケレハ、物テモナク射通シケリ。皇后是ヲ御覧シテ、イトト御心マサリニ被^レ思食^スケリ。（乙類の詞書も大同小異）

D 乾珠満珠と安曇磯良と細男

〔甲類一由良宮本〕

① 其後、カス^{（香椎）}イノ浜ト申ス所ニ付セ給フ。皇后、老人ニ被^レ仰ル様ハ、「新羅・百濟国ヘ渡付テモ、彼ノ敵共ヲハ何カシテ、可^レ打随^{（若）}（トモ）不^レ覺」ト仰ケル時、老人申様フ、「是ヨリ西ニ、志賀ノ浜ト申所候。彼ノ嶋ニアント^{（女）}ンノ磯童ト申物アリ。件ノ童ヲ召テ龍宮城ニ遣シテ、早珠満珠ト申スニ玉ヲ令^{（若）}レ借給ヘ、此二ノ玉タニモ候ハハ、彼国ヲ打随ヘ御坐サン事、イト安事ニ候」ト申ス。

② 其時、皇后被^レ仰ケルハ、「件童ヲハ何カシテ可^レ召ソ」ト被^レ仰。時ニ老人申サク、「此童ハ、セイ^{（細男）}ノウト申ス舞ヲ殊ニ愛シ侍ルナリ。此舞ヲハ又ハ、ナナ^{（奈良）}舞トモ申ナリ」。其時、「但シ彼舞ヲハ、誰人カ可^レ舞哉」ト仰アリケレハ、「海中ニ舞台ヲ構テ、此ノ老人、彼ノ舞ヲ舞ス」ト申ナリ。

③ 其舞台石ト成テ、海中ニ于^レ今侍リキ。

(37)前掲書『神道大系』論説編二十、解題。

(38)『吉備叢書』第一巻、明治三十年。

(39)関西大学図書館蔵。

其時、アントムノ磯童、此舞ヲ愛セントテ、船ニ乗テ舞台近く出来レリ。

④ 皇后、老人ニ仰有ケルハ、「件ノ玉事、彼童ニ申ヘキ」ヨシ被_レ仰ケレハ、老人童ニ申テ云、「汝チ不_レ知哉。日本国王為_二御本意遂_一新羅・百済へ渡セ給フ。日本ノ内乍_レ居国王ノ仰ヲハ、イカテカ可_レ奉_レ背、早ク御力ト成テ、彼国ノ物トモヲ、打随テマイラセヨ」ト申シ給ケレハ、此童「イカニモ、宣旨ヲハ不_レ可_レ奉_レ背」ト申テ、

⑤ 即、龍宮城ニ行テ、龍王ニ件ノ由ヲ申テ、此玉ヲ奉_レ借得。次日、早旦ニ還テ、皇后ノ御前へ持参ツカマツリケリ。其時、皇后御感ナナメナラス。

[乙類—菅田宮本]

① 其後、香椎の浜と云所に付給。皇后、此老翁を召て仰せられけるは、「我異国へ渡付といふとも、彼敵ともをハたやすく打随へき様なし。如何かせむ」との給ひたれは、翁申様、「是より西に鹿の嶋と申所に、安曇の磯良と云者あり。海中に久しくすみて、海の案内者にて侍れは、此者を召て、龍宮城につかわし、干珠満珠と云、二の玉を龍王に借せ給へ。此二の玉たにも候ハ、新羅・百済等攻めしたがへ給はむ事、いとやすき御事なり」と申ければ、

② 皇后、「件の磯良をは、何としてか召へき」と仰らるれハ、翁申さく、「此童、^(細明)せいなふと申舞を^(實)あひし侍り。此舞をハ、又ハならまひと申なり。海中に舞台を構て、此舞をまハせられハ、件童さためてきたるへし」と申。皇后、「此舞をは誰人かまふへき」との給たれハ、其時老人、「さらは翁まい侍らん」と云に、即、海中に舞台をかまへて、供奉の人々音楽を奏するに、

老人此舞を舞すまし侍ければ、

③ 件磯童、この舞を愛して、即、舞のすかたになり、浄衣にたひはゝきして、頸に鼓をかけたり。海中に久しくすミたるゆへに、かきひしなんと云物、顔にひしと取付て、あまりに見くるしかりけれハ、浄衣の袖をときて顔におほひたれて、亀の甲にのりて舞台ちかく出来る。さてこそ此舞にハ、今の世までも布を面にたれ侍りたれば、舞台は海中に石と成て、今に侍りとなむ。

④ さて、皇后老翁に仰られけるは、「件玉の事、彼童に仰含へし」との給ハ、翁申さく、「磯童ハ海中の案内者にて、供奉者侍へし。御使の人をさためらるへし」と申けれハ、「其も老人はからい申へし」と勅定ありたるに、「さらハ、皇后の御妹、豊姫を御使として、件玉をめさるへし」とて、翁勅定の趣、磯童に仰合けるハ、「汝しらすや、日本のあるし神功皇后、先皇御本意を遂んかために、新羅・百済等を攻したかへんとし給ふ。日本国にありなから、王命をハ、いかてか背奉るへき、早宣旨に随て忠節をいたすへし。就中、龍宮に二の玉あり。彼玉を借て人力を費さずして、異国を征罰すへし。豊姫に相具し奉て、龍宮におもむきて、勅宣の旨を龍王に申へし」とありしかは、件の磯童、豊姫を具し奉て、龍宮におもむきたり。

⑤ 磯童、豊姫を具し奉て龍宮に行向て、干珠満珠、二の玉を借得て、次日、早旦に帰り参たり。皇后なめならず。御感あり。

[菊大路家本]

② 住吉ノ仰ニ、「磯良ハ只今大魚打愛テ、都参ラントモセス。御神楽ヲ始メハ、彼是ヲ見テ急、可_レ参」トテ、住吉自^(ラ)、拍子ヲ取ッテ歌ヲ詠ハセ給ヘハ、諏方・熱

田・三嶋・高良大明神、笙・笛・和琴・箏
箏ヲ鳴シテ、五人ノ神樂男ト成リ、宝満大
菩薩ヲ始奉テ、八人ノ女房、八乙女ト成テ、
御手ニ鈴ヲ振り、舞歌タレ給ケリ。

③ 磯良遥ニ是ヲ見テ、「我ヲ早参レト思
食テ、御神樂ヲ被_レ 始タリ。……此神樂ヲ
乍_レ 見、如何カ可_レ 不_レ 参……」トテ、……
「我ハ依_二 宣旨_一 参也。自_二 海中_一 誰皇后
ヘ参ル者アル。便船セン」ト宣ヘハ、早亀
ト云亀近ク寄リテ、「我コソ龍王ノ仰ヲ承
テ、……只今参ル也。我カ上ニ乗給ヘ、刹
那ノ程ニ至ルヘシ」ト申セハ、此亀ノ甲ニ
乗テ、御神樂ノ終ヌ前ニ、常陸国ヨリ豊浦
ニ着ク。餘ニ顔ノ悪キ事ヲ恥給テ、淨衣ノ
袖ヲ解テ御顔ニ覆テ、御頸ニ鼓ヲ懸テ、細
男ト云舞ヲ舞給ケリ。サテコソ、今ノ世儘
モ、細男ノ面ニハ布ヲ垂タリ。

[絵画上の相違]

乙類は『八幡愚童訓』甲に、より忠実に依拠
したものである。甲類は、海上の舞台で、老翁
が細男を舞い、磯良はそれに呼応して、木の枝
に乾珠満珠の二つの玉をつけ、船首が龍頭の船
に乗って、出現する。一方、乙類は、老翁は神
樂を舞い、磯良は白い淨衣で顔を覆い、胸の前
にある鼓を鳴らし、細男を舞を舞いながら、亀
の甲に乗って出現する。

(2) 老翁—住吉神—

菊大路家本に、

四王寺山ニ御行シテ、榊ノ枝ニ大鈴ヲ付テ、
御手ニ棒テ立給事、六日儘ニ成レ共無_二 其
驗_一 ……、第七日ニハ、虚空ニ光明充滿テ
光リ、則、虚空藏菩薩ト成リ、菩薩又俗躰

ト成給フ。其御形ハ、翁仙人ノ如シ。此俗
ノ申シ給ハク、「我ハ是、地神第五ノ彦波
瀲尊也。……」。……此彦波瀲尊ハ、住吉
大明神ノ御事也

とあって、住吉大明神とは彦波瀲尊で、本地は
虚空藏菩薩であるとした。そして、俗躰は「翁
仙人」、つまり「老翁」とした。

老翁としての住吉神に論及した論稿に、「住
吉明神の御影について⁽⁴⁰⁾」があり、『伊勢物語』・
『袋草紙』・『住吉大神神代記』・『古今著聞集』
の文献を明らかにしている。『伊勢物語⁽⁴¹⁾』百
十七段に、

むかし、帝、住吉に行幸したまひけり。

我見ても 久しくなりぬ 住吉の

岸の姫松 いく代経ぬらん

御神、現形し給て、

むつましと 君は白浪 瑞垣の

久しき世より いはひそめてき

と、住吉神が「現形」したとあるが、姿形につ
いては言及していない。

また、『住吉大社神代記⁽⁴²⁾』、天平 釜 奉本記
には、

……奉_レ 幣時御歌本記。

坂木葉仁、余布止里志_三 多賀余仁
賀、賀弥乃美賀保遠、伊波比曾米藝牟

右、御歌奉_二 太幣_一 輕皇子賜_志 御歌也。時、

東一大殿、押_二 開扉_三、大神表_二 美麗貌

人_一。取_二 白笏_一 叩_レ 闕和歌、……

と、住吉神が「美麗貌人」として顕現したとす
る。

藤原清輔の『袋草紙⁽⁴³⁾』上巻、「希代和歌」
は、赤染衛門の三首の歌のあとで、

是ハ、江舉周和泉去_レ 任之後、重病悩而

(40)宮地直一「住吉明神の御影について」、『国華』第六
〇〇号、昭和十五年。

(41)新日本古典文学大系『竹取物語・伊勢物語』。

(42)田中卓著作集『住吉大社神代記の研究』、国書刊行
会。

(43)新日本古典文学大系『袋草子』。

有_二住吉御崇_一之由、仍奉_二幣彼社_一之時、
三本幣ニ各所_レ書歌也。其時、人夢ニ白髪
老翁、社中ヨリ出来テ、取_二此幣_一テ入了。
其後、病平癒云々。

としている。赤染衛門は子の舉周が、住吉神の
崇りで重病にかかったとき、三本の幣に和歌を
付けて奉納し、病平癒の祈願をする。そのとき、
「白髪老翁」が出現したという。

大江匡衡
||— 舉周
赤染衛門

ところで、『袋草子』の赤染衛門の第一首、
代らむと おもふ命は をしからで

さても別れむ ことぞかなしき

の歌は、『詞花和歌集⁽⁴⁴⁾』巻第十、雑下、三六
二にあり、その詞書に、

大江舉周朝臣をもくわづらひて、限りにみ
え侍れければよめる

とある。清輔はこの『詞花和歌集』の撰者、顕
輔の第二子である。

第二首は、勅撰集『後拾遺和歌集⁽⁴⁵⁾』巻第十
八、一〇六九にあり、その詞書に、

舉周、和泉任果てゝまかりのぼるまゝに、
いと重くわづらひ侍けるを、住吉のたゝり
などいふ人侍りければ、幣たてまつりける
に、書き付けゝる

とあるが、老翁についての言及はない。

しかし、私家集『赤染衛門集⁽⁴⁶⁾』は、三首の
詞書に、

舉周かいつみはてゝのほる儘に、いと重う
わづらひしに、住吉の(たゝり)給ふと人
のいひしか、みてくらたてまつられしに、

かきつけし。

とあり、あとがきに、

たてまつりの夜。人の夢に、ひけいとしろ
き翁、このみてくらを、みなからとるとみ
て、おこたりにき。

と、「髭いと白き翁」とある。これらすべてに
依拠したのが『袋草子』の記事であろう。『赤
染衛門集』は、流布本系、異本系とも、巻末に
関白頼通への自撰献上の次第を記している。つ
まり、私家集『赤染衛門集』の老翁が、住吉神
「老翁」の初見である。

さて、長元年間(一〇二八~三七)の成立と
される『栄花物語』正編の作者は、赤染衛門と
されている。この巻第二十四、「わかばえ(若
枝)⁽⁴⁷⁾」に、御霊会の細男について、

御霊会の細男のて^(手紙)のこびして、顔隠したる
心地するに、……

とある。この御霊会については、『日本紀略⁽⁴⁸⁾』
後編十、長保三年(一〇〇一)五月九日条に、

於_二紫野_一祭_二疫神_一号_二御霊会_一。依_二
天下疾疫_一也。此日以前、神殿三字、瑞垣
等、木工寮修理職所_レ造。又御輿、内匠寮
造_レ之。京中上下多以集_二会此社_一。号_二
野今宮_一。

とあり、後編十一、寛弘二年(一〇〇五)五月
九日条に、

紫野御霊会也。東西二京、条坊十列、細男
已有_二其数_一。

とあって、紫野今宮社の御霊会と思われ、『栄
花物語』正編の作者が赤染衛門ならば、赤染衛
門にとって、奈良舞としての細男と老翁は何ら
の連関性を認識したものではない。

また、建長六年(一二五四)成立の『古今著

(44)新日本古典文学大系『金葉和歌集・詞花和歌集』。

(45)新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』。

(46)『群書類従』第十五輯。

(47)日本古典文学大系『栄花物語』下。

(48)新訂増補 国史大系『日本紀略』。

聞集⁽⁴⁹⁾』卷第一、神祇第一、五に、

慈覺大師、如法經かきたまひける時、白髪
の老翁杖にたづさはりて、山によぢのぼり
けるが、「あなくるし。内裏の守護といひ、
此如法經の守護といひ、年はたかう成て、
くるしう候ぞ」との給けり。「たが御渡候
ぞ」とたづね申されければ、「住吉神也」
とぞ名乗給ける。

と「白髪老翁」とあり、卷第五、和歌第六、
一六五に、

嘉應二年（一一七〇）十月九日、道因法師
人々をすゝめて、住吉社にて歌合しけるに、
後徳大寺左大臣、前大納言にておはしける
が、此歌をよみたまふとて、社頭月といふ
ことを、

ふりにける 松ものいはゞ 問てまし
むかしもかくや 住吉の月
かくなむよみ給けるを、……年貢つみたり
ける船、摂津国をいらむとしける時、悪風
にあひて、すでに入海せんとしけるを、い
づくより翁一人いできて、こぎなほして別
事なかりけり。船人あやしと思ふ程に、翁
のいひけるは、「松ものいはゞ、の御句の
おもしろう候て、此辺にすみ侍翁のまゐつ
ると申せ」といひてうせにけり。住吉大明
神の彼歌を感じさせたまひて、御体をあら
はしたまひけるにや。ふしぎにあらたなる
事かな。

と、十三世紀中葉の『古今著聞集』に、住吉神
の老翁顕現の説話が語られている。

文治元年～建久四年（一一八五～九三）の成
立とされる『袖中抄⁽⁵⁰⁾』第九、「しるしのすぎ」
に、

又、神功皇后伐新羅給之時、住吉は大
將軍、日吉は副將軍。將門追討之時は、日
吉は大將軍、住吉は副將軍也。三千法施し
げきによりて、日吉位まさり給よし、江記
に侍り。

とある。これは、建暦三年（一二一三）成立の
『古事談⁽⁵¹⁾』第五、神社・仏寺、三五に、

住吉大明神託宣云、昔伐新羅之時、吾
為大將軍、日吉為副將軍。

とあるように、住吉大明神の託宣とする。

『古今著聞集』卷第一、神祇第一、一に、

凡我朝は神国として、大小神祇、部類眷属、
権化の道、感応あまねく通ずる物也。所謂、
神功皇后の三韓をたひらげたまふにも、天
神地祇ことくあらはれたまひけるとぞ。

とある。このように、十三世紀の中葉までは、
「神功皇后伐新羅給之時」に天神地祇、中
でも、大將軍・住吉神が強調された時代ではあ
るが、『古今著聞集』の老翁の記事の存在は、
神功皇后の「新羅征伐」において、老翁活躍の
筋書きを、創作し添加していく時期ではいまだ
なかった、ということを示す。

第四章 甲類の成立論

(1) 鞆淵宮本と「平時平」譚

大分県立宇佐風土記の丘・歴史民俗資料館発
行の図録『八幡大菩薩の世界』は、和歌山県那
賀郡粉河町中鞆淵の鞆淵八幡神社蔵の白描「八
幡縁起⁽⁵²⁾」を、「安貞二年（一二二八）、石清水
八幡宮から贈られたと伝える」（52頁）と解説
し、同「資料館ニュース」No.17には、「安貞二
年成立を伝える鞆淵八幡宮本」と解説する。

(49) 日本古典文学大系『古今著聞集』。

(50) 『日本歌学大系』別巻二、風間書房。

(51) 古典文庫『古事談』下、現代思潮社。

(52) 鞆淵八幡宮本は、亀田孜『仏教説話絵の研究』（東京美術）所収の「鞆淵八幡社の白描縁起」と、『和歌山県史』（中世史料一）に翻刻されている。

『紀伊国名所図会⁽⁵³⁾』三編、卷之三、友渕八幡宮、神宝・神輿に

安貞二年、山城国男山八幡宮より贈る所に
して、其時の添状今に存す。

とある。添状には、「石清水八幡宮 奉送二御輿、葱花一基目錄事。……安貞二年八月十八日神宝所行事 法橋上人位琳嚴」とある。また、神宝・宇佐八幡宮縁起に、

絵詞の書牘、古牘の文字多し。絵ハすへて彩色を用ひず。甚古雅なり。今その一葉を模写して好古の一助とす。是又、安貞二年に石清水より納むるところか。

とあり、「図録」や「ニュース」は、これらの記事を根拠にしたもので、「安貞二年に石清水より納むるところか」とする編著者のコメントを、無批判に摂取したものである。この立場に立てば、石清水八幡宮には、安貞二年以前に絵巻が存在していなければならない。つまり、絵巻を構成するすべての物語が完成していなければならない。しかし、この安貞二年の記事は、神輿が贈られた年次を示すものでしかない。しかも、亀田孜氏のように、「画態」からみて、「鎌倉の最末期か、応永の初期⁽⁵⁴⁾」の成立とする主張さえある。

甲類の成立時期に関しては、宮次男氏の次の見解がある。「八幡縁起絵巻⁽⁵⁵⁾」において、

太宰大貳に再任された平時平が、箱崎八幡宮を建立することになったのは、延喜二十一年（九二一）のことで、詞には「宝社造営ヨリ以来タ三^{ツノ}百餘歳ニ及ヘリ」とあり、これによると、この記事が書かれたのはおそらくとも十三世紀中頃ということになる。

とし、「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起⁽⁵⁶⁾」下においては、延喜二十一年の「三百年後の西暦

一二二一年以降、若干年のうちに成立したと考えることができる」と、同様の主張をしている。これを検討してみよう。

[由良宮本]

① 其後、延喜ノ御門ノ御時、一人ノ大臣御坐^{いまし}き。平朝臣時平ト申シ人、太宰府ノ大貳ト成テ下ラセ給ヘリ。俄ニ一位ヲ經テ京ヘ上給ヌ。此大臣立願ニ、彼八幡三所権現ニ歩ヲハコヒテ申セ給テノ給ハク、「願クハ、我今一度太宰ノ大貳ト成セ給ヘ。若、此所願成就仕ハ、必ス御殿ヲ造改、奉ム」ト祈請シテ、七日籠テ京ヘ登ラセ給テ後、無^レ程又大貳ト成テ下セ給ニキ。

② 而ニ、是大貳世間ニ打マキレテヤ、息^(ヤミ)ニケン。是則、大菩薩ノ御利生、又神慮ノ恵ミト云事、更ニ忘タリケルヲ、女帝ノ御門ノ御願観音寺ト申ス寺ノ三千ノ講匠ノ内、唯一講師ト申ス僧ノ七歳ノ女人アリキ。大菩薩、此女子ニ付給テ地ヲ挙ル事一丈。空ヲ飛、大貳殿ノ御坐ケル御前ニ飛ヒ行テ、御託宣ヲ成テ、「爰ニ汝不^レ覺哉如何。汝京ニ侍リシニ、我御殿ニ七日参籠シタリシ時、我ニ願ヲ発シテ進^{マイラセ}タリ。今此願力ニ依テ、爰ニ大貳ノ職タリ。何ソ神恩ヲ忘テ、今此願ヲハ遂サルソ」ト、御託宣ノ有シ時ハ、延喜廿一年ノ事也。

③ 爰ニ大貳殿、驚キサハキテ申給ハク、「実ニサル事候キ。凡夫具縛ノ身ハ、世間ノ事ニ打マキレ候テ、此事一切不^レ覺候キ。敢テ神恩ヲ奉^レ忘事ハ候ハス。然則、御殿ヲヤ造替候ヘキ。又何所ニカ可^レ奉^レ崇」ト申給シ時、

④ 重テ御託宣成テ被^レ仰。「是ヨリ戊亥ノ角ニシララノ浜アリ。我天下ノ国土ヲ守

(53)版本地誌大系⑨『紀伊国名所図会』三編、臨川書店。
(54)注52の「瀬洲八幡社の白描縁起」。

(55)注4。

(56)注5。『美術研究』第三三六号。

護セシ始、戒定恵ノ箱ヲ埋^{ツルシ}テ駿ノ松ヲ立テ
キ故、彼所ヲハ箱崎ト名付。其松ノ本ニハ
八幡フリタリキ。其以^レ故、八幡大菩薩ヲ
彼所ニ可^レ祝也。我御殿ノ正方ヲ戊亥ノ
角ニ向テ、九間ニ是ヲ造レ。石スエノ石ノ
上ニハ、異国ノ敵ノ名ヲ可^レ書。是則、異
国降伏ノ為也。内廊外（廊）ヲハ二棟ニ造
テフキアワセニフキ、二階ノ樓門ヲ立ヨ。
内廊ハ諸神集会ノ為、外廊ハ被^レ覆修行ノ
物^(マ)ノ料。二階ノ樓門ハ王位威勢ヲトロヘ、
人民力ヲ衰タラン時、定、彼ノ怨敵出来時、
我、彼樓門ニ昇テ、彼敵ヲフセクヘシ。……
人間ノクルシミハ我苦也。……垂テ異国殺
害ノ物^(マ)ヲ孝養スル身也」ト、御託宣アリシ
カハ、

⑤ 彼大臣平時平、箱崎ニ參テ速ニ御託宣
ニ任テ、宝殿、樓門玉ヲ以ミカキ、鐘樓廻
廊ニハ金銀ヲチリハメ、加^{シカノミナラス}之、神富ノ郡
ヲ以、彼社領ニ寄奉テ、惣シテ宝社造営ヨ
リ以来、三百餘歳ニ及ヘリ。

平時平は、八幡大菩薩に「太宰府ノ大式」再
任を祈請し、成就のとき「御殿造改」を約束し
たが、忘却する。大菩薩は、延喜二十一年に、
「唯一講師ト申ス僧ノ七歳ノ女人」を派遣し、
詰問する。大菩薩の託宣によって、箱崎の地の
「戊亥ノ角ニ向テ九間」の御殿を造り、「石スエ
ノ石ノ上ニハ、異国ノ敵ノ名」を書いた。また、
「内廊外廊」の「二棟」と「二階ノ樓門」を造
り、「宝殿、樓門」は「玉」で磨き、「鐘樓廻廊」
には「金銀」をちりばめた。

宮次男氏は、「平時平」譚の成立を、「惣シテ
宝社造営ヨリ以来、三百餘歳ニ及ヘリ」という
文言から、九二一年の宮崎宮造営を起点に、三
百年後の「一二二一年以降、若干年のうちに成

立した」とするのである。しかし、この「平時
平」譚は、『諸縁起⁽⁵⁷⁾』所収の「宮崎宮縁起」
に依拠したものである。

宮崎宮縁起 以神龜三年^{乙丑}造^五穗浪宮云々

① 延長元年（九二三）^{癸未}造^五立^五宮崎宮^五。
依^レ託宣^五自^五穗浪宮^五遷^五此宮^五。延喜
廿一年六月廿一日、於^五觀世音寺西大門^五、
天若宮一御子、七歳女子橘滋子^五就^五御^{志天}、
去^レ地七尺上^天託宣曰、「當寺講師遺一、
可^レ召、可^レ仰事^五有也。又、少式真材朝
臣、同可^レ召^五」^{土宣布}。

② 以^五此由^五觸^五少式館^五。于^レ時、真
材朝臣驚恐^五、即以^レ参对^{世利}。其時、宣^志
曰、「吾是八幡^五若宮一御子也。大菩薩仰
云、吾穗浪郡大分宮^五移住後、已、有^五三
惡^五……。因^レ之、避^五彼地^五、欲^レ移^五
住宮崎松原^五。有^五其故^五、昔我天下国土
乎鎮護^{世利}時、戒定恵^五嘗^五彼松原^五乃地^五、
所^五埋置^五也。仍、其名^五嘗^五宮崎号^{奈利}。

③ 抑、真村朝臣、先年於^五石清水宮^五 皇
八幡宮歩廊可^五造進^五之由、所^五立願^五也。
実否、如何」。真村朝臣仰伏^志申云、「然
奈利^五、任^五朝臣宿念^五 皇、早可^レ造^五
立宮崎新宮^五也。其可^レ作之様、可^レ向^五
新羅国方^五、西面中門樓^五左右二棟廊、南
北脇門以^レ西者、同二棟。脇門以^レ東者、
单廊^五可^レ造也。……

④ 抑、末代^五人民力弱、公家勢衰之比、
新羅国是古敵也。来寇可^レ起^志、因^レ茲、
宮崎^五新宮^五礎面^五、敵国降伏之由書付^五、
可^レ立^五其柱^五、又吾座下^五同伴字^五乎可^レ
置^志。其宮殿^五梁柱^五可^レ用^五柏也。如^レ
此則、彼新羅敵国、自然降伏^{志奈}……」。

⑤ ……任^五官府旨^五、少式真村朝臣造^五

(57)『石清水八幡宮史料叢書』二、統群書類従完成会。

立件新宮。其官府状云、「託宣之旨為_レ禦_二来寇_一。加之、外賓通接之境也。宮_二其宮殿_一、殊盡_二美麗_一者、延長元年癸未歲、從_二大分宮_一遷御。仏經已畢。仍奉_二号宮崎宮_一矣。」

延長二年二月廿五日重記之。

(2) 平時平譚と宮崎宮縁起

「平時平」譚と「宮崎宮縁起」を単純に比較してみても、「平時平」譚が「宮崎宮縁起」に類似する、ということが判明する。観音寺と観世音寺、唯一講師と講師遺一、七歳の女子と託宣、内廊外廊二棟と左右二棟廊、

「石ノ上ニハ異国ノ名ヲ可_レ書」と、「礎面_ニ敵国降伏之由書付」の対比などなど。

「宮崎宮縁起」に、「於_二石清水宮_一、八幡宮歩廊可_二造進_一之由、所_二立願_一也」とあって、石清水八幡宮で宮崎宮の「歩廊」造進を立願したといっている。「平時平」譚はこれに対比して、「汝京ニ侍リシニ、我御殿ニ……、我ニ願ヲ発シテ……」とあって、「我御殿」とは石清水八幡宮のことで、石清水宮での宮崎宮の「御殿造改」の立願をさしている。このように、「平時平」譚は「宮崎宮縁起」に依拠して出来たものである。

宮崎宮と石清水宮の関係については、文治元年十一月八日付の「摂政家（近衛基通）政所下文⁽⁵⁸⁾」に、

摂政家政所下 筑前国宮崎宮所司等

可_下早以_二當宮_一為_中石清水別宮_上事
右、依_二院宣_一所_レ被_二寄進_一也者、所司等宜_二承知_一……

文治元年十一月八日

とあって、宮崎宮は文治元年（一一八五）十一

月、石清水八幡宮の「別宮」、つまり、所領になっている。また、『諸縁起』の成立については、奥書に、

別當法印権大僧都幸清撰

建保七年_{己卯}閏二月廿五日書了

とあって、建保七年（一二一九）以前の成立である事が判明する。

すでに戦前、八代国治氏は、論稿「宮崎宮の敵国降伏の宸翰に就て⁽⁵⁹⁾」で、「宮崎宮縁起」は、「石清水宮に於て八幡宮歩廊を造立すべき由立願する所なりとあるから、宮崎宮と石清水宮と関係が生じた後に出来たものであろう」と指摘し、「別宮となった文治元年以後、諸縁起編纂の建保七年以前」の成立であることを明らかにしている。しかし、『諸縁起』の成立が、ただちに「平時平」譚の成立を示すものといえない。依拠した「素材」を意味するにすぎない。

「菊大路家本」下_上には、「宮崎宮縁起」を参考にして、（番号は「宮崎宮縁起」に対応）

② 去モ其中ニ宮崎ノ宮ハ、本ハ穂浪ノ社ニ御坐ケリ。彼所ハ山高道険クテ、節会ニ参ル社官ノ人馬、泥_{ナツ}ミ疲ケルヲ憐ミ思食テ、「民ノ苦ハ我苦ニアリ。……又放生ハ海上ノ事也。穂浪ハ放生ノ地ニ非ス。昔、我レ天下国土ヲ鎮護シ始シ時、戒定恵ノ三ノ宮ヲ此松原ニ埋メリ。早ク宮崎ノ新宮ニ可_レ移」シト在リシカハ、

④ 太宰少貳真材朝臣、石清水八幡宮ニテ可_レ奉_レ造_二進歩廊_一由、立願在リト云ヘ共、「此新宮ヲ可_二造宮_一御殿ヲ乾ニ向ケ、柱ニ柏ヲ可_レ用、末代ノ人民ノ力弱ク、公家ノ勢ヒ衰ヘン比、異国ノ逆人出来ハ、敵国降伏ノ由ヲ書_二付テ礎ノ面ニ_一、吾座ノ下ニ可_レ置、敵国ヲハ以_二定恵ノカヲ_一自

(58)大日本古文書『石清水文書』之二、六三〇、東京大学出版会。

(59)八代国治『国史叢説』、吉川弘文館、大正十四年。

然ニ可_レ降伏_ニト、

① 延喜廿一年六月廿一日ニ、七歳ノ女子、
地ヲ去ル事七尺ニシテ、御託宣_ニリシカハ、

⑤ 真材首ヲ傾テ、宿願未_レ他人知_ニサル
ニ、神靈無_レ違事_ニ、信心肝ニ銘シ、急キ
経ル_ニ奏聞_ニ處ニ、其官府云、「託宣之旨、
為_レ禦ソカ_ニ来寇_ニ、加之外賓通抵之堺也。
宮_ニ其ノ宮殿_ニ、殊可_レ盡_ニ美麗_ニ」ト、
被_ニ仰下_ニ。醍醐天皇ノ御宇、延長元年ニ
造宮シテ祝_レ給ヘル八幡大菩薩ノ別宮也。
御座ノ下ノ文字ハ公家ノ震筆ヲ被_レ下。

とある。

「平時平」譚と同じく、甲類を構成する「干
珠満珠」譚、「新羅国ノ大王ハ日本ノ犬ナリ」
譚、「応神胎内指揮」譚等の基本的な内容も、

『諸縁起』に見られる。しかし、それぞれの成
立と変容⁽⁶⁰⁾を考慮して、「平時平」譚の成立が、
「一二二一年以降、若干年のうち」(宮次男論文)
に成立したものとは信じがたい。

「平時平」譚④に、「人間ノクルシミハ我苦
也」とする文言があり、「菊大路家本」②にも、
「民ノ苦ハ我苦ニアリ」とする文言があって、
このことは、「平時平」譚の成立が、『八幡愚童
訓』甲からも影響を受けたことを示すものであ
ろう。『八幡愚童訓』甲の初稿本は、永仁元年
～正安二年(一二九三～一三〇〇)間に作成さ
れたものとされ、菊大路家本の書写年は、鎌倉
末期から南北朝初期までの期間⁽⁶¹⁾と思われる。
つまり、「平時平」譚をふくむ甲類全体の成立
は、『八幡愚童訓』甲の成立後と考える。

(60) 拙稿「謡曲『剣珠』『西宮』と干珠満珠」、『鷹陵史学』
第19号、仏教大学・鷹陵史学会。拙稿『「新羅国ノ大
王ハ犬ナリ」考』(上)、『東アジア研究』第10号、大
阪経済法科大学東アジア研究所。拙稿「北条政子と日
野富子」、『東アジア研究』第9号。

(61) 原本成立については、『群書解題』第六卷、神祇部
の西田長男氏の解題参照。また、菊大路家本の書写年
については、拙稿『「八幡愚童訓」甲の「屠児」記事
をめぐって』、『部落問題研究』第137輯(96年7月)参考。